図73　法華寺寺域と門SB7110の関係　1：4000

5　まとめ

本調査では、条坊道路の側溝をほぼ1町ぶんの長さにわたり調査することができた。門の発見により法華寺の寺域について考察できるデータを提示できたことと、側溝から木簡をはじめとする多量の遺物の出土をみたことが特筆できる。

しかし、現在では都市化の波を受け、本調査を含めて法華寺周辺の開発事前調査が増加し、1996・97年度で左京二条二坊十一坪はそれまでの水田から、住宅地へと景観が一変した。阿弥陀浄土院推定地にあたる十坪には水田内に大きな石が存在し、内部園池の立石ではないかとの意見もある。現在、この周囲だけが水田として箱庭的に残存しており、開発の手は確実に伸びてきている。いかに遺跡保存と調査成果の活用を図っていくか、という問題を浮き彫りにした調査であった。　（金田明大）

註）

1）「第80次調査」『昭47平城概報(2)』
2）本年報66-67頁
3）「左京二条二坊十一坪の調査」（『年報1997-Ⅲ』）
4）奈良市教委「左京二条二坊十一・十四坪境小路の調査第151次」（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』1989年）
5）上記文献、東二坊坊間東小路の中軸線はY＝－17.656.315
6）『続日本紀』天平宝字五年六月庚申条
六月庚申、皇太后の周忌の斎を阿弥陀浄土院に設く。その院は法華寺の内、西南の隅にあり。忌の斎を設けむが為に造れり。その天下の諸国は各々国分尼寺に阿弥陀丈六像一軀、挟侍菩薩像二軀を造り奉る。（岩波書店・新日本古典文学大系本による）
7）応永13年(1406)成立。
8）『三箇院家抄』所収。成立は応仁2年(1468)～文明元年(1469)と推定されている。
9）喜田貞吉「平城京及大内裏考評論(八)」（『歴史地理』13－4　1909）
10）太田博太郎「法華寺」（『大和古寺大観第五巻』1976　岩波書店）
11）前掲註10)。このうち、西塔は宝永四年(1707)の地震まで残っていたことが知られる。

平　城　専（こらむ）欄　②

◆調査日誌から　1997年6月6日

夏を思わせる暑い日。東一坊大路西側溝から出土したばかりの木簡を見ていた某調査員は、驚きの声をあげた。その木簡は残念ながら上端が欠けていて、表裏ともに上の一文字が読めなかったが、表には「善妻娶時来」、裏には「眼見眼見不如手作」と記してあったのだ。これは、何かの文章を書き写したものか、はたまたまじないに使ったものなのか。

おりしも、この発掘調査にあたっている調査員には、総担当者をはじめ、独身者が3人いた。そのうえ、調査部初の女性調査員、花の独身H嬢も新人研修として参加していた。それからしばらくしてからでしたね、キミが来年結婚することが明るみにでたのは・・・、木簡をとり上げた今年の年報編集者・H君!!この木簡は、婚期の到来を告げ、祝福した地中からのメッセージだったのですね。

その後、もう一人の独身調査員Sも電撃的な結婚を果たし、バラ色の新婚生活を送っているらしい。まさに、木簡の霊験あらたかといったところだが、総担当者・Y君だけはまだ独身のままである。彼は、今度こそ自分の分を掘り出そうと、次の現場の二条条間路北側溝での捲土重来を期しているというもっぱらの噂である。

実は、この妻を迎える木簡、きっと本来は2枚セットだったのだと思う。もう1枚の「楽旅行往時亦来」と記した木簡は、闇から闇に葬られてしまったのではないか。そのため、HもSも結婚式は挙げたものの、新婚旅行に行くことはできずに、滅私奉公している。今度の発掘では、2枚ともに掘り出さなくてはいけませんよ、Y君!!

ともあれ、皆さん、ご結婚おめでとうございました。　（T）